■ 2026/4/2(木) 朝日新聞 三重版「運べるトイレ さらに小型化」
2026/3/25 ミニソフィ披露会、感謝状贈呈

運べるトイレ さらに小型化

津の建設業開発 高校生が絵で彩る

アルコが開発した小型の可搬式循環型トイレ

可搬式循環型トイレの内部。一般家庭で使う浄化槽（奥）と微生物を含む土を使った処理装置がある＝いずれも津市藤方

津市の建設業「アルコ」が小型の可搬式循環型トイレを開発した。従来製品と比べて重さが半分になったことから、それほど大きくないトラックでの搬送が可能になり、災害現場での活躍が期待されている。

同社は2004年創業。従業員約40人の中小企業だが、大手セメント会社が開発した汚水循環システムの販売代理店になっていたことから、可搬式循環型トイレを独自に開発し、18年から売り出した。

新たに開発したトイレは「ミニソフィ」と名付けられ、コンテナやトイレの部分を含めても重さは3トン程度。微生物が多く含まれる土を入れた処理装置と、一般家庭で使われる浄化槽を組み合わせ、汚水の色や臭いをほぼ取り除いた状態にして循環できるという。

1日あたり50回分の汚水を、2日ほどかけて処理することができる。循環された水は、そのままトイレを流す際に再利用する。

必要な電力は天井に取り付けた太陽光パネルか、外付けのポータブル電源でまかなうことが可能。使用する人に親しみをもってもらおうと、外側を高田高校美術部と漫画アニメ部の生徒たちが手がけた絵で飾った。

価格は1千万円程度に抑えたため、防災対策に力を入れる小規模の自治体などでも購入しやすくなった。東京電力の子会社「東京パワーテクノロジー」と協力し、販路を全国に拡大していくという。

近年、頻発する災害現場では、衛生面を含むトイレの環境が課題として浮き彫りになっていた。アルコの東和生会長は「小型化できたことでより広い範囲に移動することができるようになった。普段は公園などで使い、災害時には被災現場に持って行くような使い方をしてもらえれば」と話している。（安田琢典）